

令和4年度

文京区議会建設委員会 視察報告書

1 視察日程

令和4年7月14日（木）

2 視察先及び目的

東京都立砧公園（住所：世田谷区砧1番1号）

誰もが遊べる児童遊具広場の整備に関する調査・研究

3 視察参加者

委員長 山田 ひろこ

副委員長 板倉 美千代

理事 たかはま なおき

理事 沢田 けいじ

理事 田中 としかね

理事 岡崎 義顕

理事 高山 泰三

委員 吉村 美紀

随 行 下笠 由美子（区議会事務局議事調査担当主査）

4 視察先対応者

東京都建設局公園緑地部公園建設課活用整備推進担当課長代理 仲辻 周平 氏

公園事業部防災公園区部西エリア担当課長 荒井 克己 氏

公益財団法人東京都公園協会砧公園サービスセンター長 川崎 幹雄 氏



仲辻 周平 氏



荒井 克己 氏



川崎 幹雄 氏

5 事業内容

(1) 公園概要

都立砧公園に所在する「みんなのひろば」

東京都が整備主体となり、公益財団法人東京都公園協会が指定管理者として管理を行っている。

公園全体の面積は 39.2ha であり、そのうちフェンスで囲われている「みんなのひろば」は、約 3,200 m²となっている。

開園時間は、9 時～17 時、冬場は 16 時までとなっており、障害の有無にかかわらず無料で利用できる。

有料となるが、公園内に駐車場も整備されている。



(2) 東京都における「みんなのひろば」整備の経緯

東京都は、障害の有無にかかわらず、あらゆる子どもたちが共にあそび楽しむことができる遊具広場の整備に取り組んでおり、その第 1 号としてオープンした施設である。2019 年 11 月から 2020 年 3 月にかけて工事が行われた。工事金額は約 2 億円。

整備に先立ち、様々な子どもの障害関係者へのヒアリング及び有識者への意見聴取を行い、整備の方向性を検討した。

意見聴取の結果、障害の種類が異なっても、「体幹の弱さに対応した遊具」や、「介助者との使用」、「ハイハイできるクッション素材の舗装」、「迷子や飛び出し防止の囲い」等の共通する意見が得られた。また、遊具広場以外にも、アクセスやトイレの施設内容などの共通意見もあり、それらを整備に反映させている。

(3) みんなのひろばの運営状況

遊具は10基、ベンチや野外テーブルが24基設置されており、子どもの背の高さほどのフェンスで囲われている。

基本的には自由に遊べることになっており、職員・プレイワーカーは配置していないが、毎朝開園前に安全点検を行っている。

コロナ禍において300人を超える混雑時には、人数制限をかける予定としているが、現在まで人数制限をかけるに至っていない。

オープンから多くの子どもたちに利用され、人気の遊具は行列となることもあり、小さなトラブルは、子ども同士で解決する姿が見られる。

年齢が高い障害者への対応など、利用上の対応マニュアルを検討している。

(4) 事業の効果

広場のオープン以来、遠方からの来園やメディア取材、視察など多くの反響がある。

障害のある子もいない子も一緒に遊べる広場としてにぎわいが見られるが、障害のある子の保護者からは、混雑していて利用しにくいとの声も寄せられている。

障害のある子もいない子も自然に交わりあって遊べるのが理想だが、なかなかそういうことは起こらない。今年6月12日には、「ヒマワリを育てよう」というイベントを開催し、障害のある子どもにとっても保護者にとっても、また、相互の交流を図るためにも非常に大切な外出の機会となった。

今後も、アートワークショップや、秋のお花を育てるイベントを開催予定とのこと。

(5) 今後の展望

ハード面の課題として、実際に運営してみて改善すべき点が見えてきた。

例えば、遊具のスロープの幅はマニュアルにのっとり余裕をもって設定したが、より広いほうが望ましいと考えられる。また、車いす利用者が介助者の手を借りずに、自分の力でより多くのことができるような工夫も検討の余地がある、など。

ソフト面の課題としては、障害児が特異な目で見られてしまうことによる“壁“が存在する、健常児が多い場所では遠慮して遊べない子どももいる。イベント開催など、相互理解を深める機会を充実させていきたい。

「みんなのひろば」は敷地面積が大きく（3,200㎡）、様々な遊具が取り入れられた一方で、小規模な公園では同様の整備はできないと考えられてしまうかもしれないが、インクルーシブ遊具の配置は「選択肢があること」が重要なキーワードである。たとえば、様々な座面形状のブランコや、様々な高さのベンチを設えることなど、それぞれの公園で何ができるかを考えて取り組むことによって、利用者の選択肢の幅が広がる公園設計となると考える。

東京都建設局公園緑地部公園建設課では、誰もが楽しめる遊具広場のネットワークを拡げていくため、他の自治体に提供するための「だれもが遊べる児童遊具広場」整備ガイドライン（令和3年4月）を公表した。

今後も遊具広場を足掛かりに、互いに理解し尊重し合える公園環境の実現に向けて取り組んでいく、としている。

6 主な質疑応答

(1) 現地視察（みんなのひろば）

Q： フェンスを設けた理由は？

A： 障害児（特に、知的障害のある児童）がパニックになって出ていけないため。切り株の遊具の中の椅子で人目を避けて休めるようになっている。



Q： 黄色いフェンスの中には何があるのか？

A： 普通のターザンロープ遊具。整備前はターザン広場とわくわく広場（7歳未満用）だった。わくわく広場は現在も併設している。

Q： 遊具の対象年齢は？

A： 子どもが楽しく遊べる年齢を、遊具にシールで表示している。

Q： パーゴラの日除けは取り外しできるのか？

A： 暴風や降雪時に畳める仕様。みんなのひろばは元から高木がなく日除けがない。協力団体とのモニタリングの結果、追加で設置したもの。夏季はヨシズも設置している。



Q： 障害児の利用割合は？

A： 1:9 (障害児：健常児)。実際はそれ以下かも。障害児の保護者は他の子どもが遊んでいる時間に来たがらないため、オープン時は1時間早めにオープンして優先的に体験してもらったが、今はやっていない。

Q： 障害児の利用を増やす努力は？

A： コロナで出鼻をくじかれた。養護施設などにこれから働きかける。障害児の保護者の気持ちを変えるきっかけが必要。ここに来れば他の子と一緒に遊べる、子ども同士は分け隔てなく遊べるということを体験で知ってもらうことで、他の公園にも行きやすくなる。草の根的なイベントをこれから広げていく。

Q： 公園内に水場はあるのか？

A： ない。アンケートでも要望があり、出口の横に非接触型の手洗場（センサー式手洗いBOX）を設置した。費用は50万円くらい（本体27、28万くらい+工事費）。少し楽しみながら感染症にも対応。保護者の方も楽しみながら使っている。



センサー式手洗いBOX ▶

Q： 緊急事態宣言時は？

A： 開放公園のため閉じなかった。他が閉じて余計に利用者が増えた。その後のコロナ禍も利用者は減らなかった。都市公園の存在意義。

Q： みんなのひろばの利用時間を定めている理由は？

A： いたずらされることなどがあるため、ある程度隔離した空間を作っておく。破壊行為は本当に大変。スプレーで落書きをされることもある。みんなのひろばではそのようなことは発生していない。

Q： 年間の来場者数

は？

A： 平成30年200万人。平成31年～令和元年200万人。令和2年230万人。令和3年220万人。大きなテーマパークに行けないから開放公園へ。コロナ禍において来場者数が15%くらい伸びた。

(2) 質疑会場（売店横無料休憩所）での質疑

ア 利用者同士の交流

Q： 障害のある子と、ない子が一緒に遊ぶ機会はあるか、また、交流が生まれるような工夫がどのようにされているか伺いたい。

A： 障害をお持ちのお子さんの保護者は外に出たがらないし人混みを嫌う。人がいない早朝や夜を選ぶ人が多い。イベントを開催して、「昼間に来て遊んでください」というメッセージを発信している。6月には近隣の障害児支援のNPO団体とボランティア団体、まちづくり会社とうち（東京都公園協会）の4社でイベントとアートワークショップを企画開催した。朝10時過ぎから13時過ぎまで開催し参加人数は130人。近くに協力団体がないと、うちだけでは何もできないし響かない。輪が広がっていかない。やりたいと相談して一緒に企画してもらおう。

Q： 冊子「みんなの声から始めよう」に白梅学園大学の汐見稔幸さんが書いているとおり、本当のインクルーシブを実現するには、ただ一緒にいるだけではなく、互いに人間理解や自己理解が深まる仕組みが必要では？

A： ただ広場を提供し遊んでいるだけでは混じり合わない。イベントで一緒に色を塗ったりコミュニケーションしたりが必要。親同士も。広場では子ども同士を放ったらかしにはできないが、ワークショップなら支援団体のスタッフに任せられる。イベントをたくさんやったらよいと思う。

イ 来園手段

Q： 障害のある子はどこからどのような手段で来ているか伺いたい。

A： 近隣の世田谷区からが多いが、駐車場が近いから砧公園が選ばれた経緯もあり、近隣県からも来る。ひろばができたことに嬉しくなって車で来る方もいる。

ウ インクルーシブ公園への考え方

Q： インクルーシブ公園が今後増えていくことを期待しているが、地域にどのくらい増えていくべきか伺いたい（すべての公園でどの子ども分け隔てなく遊べるのが理想だと思うが、インクルーシブ遊具を配置する、ハード面の解決だけではなく、プレイパークの急坂で助け合いが生まれるような、人助けで乗り越える場面も望ましい形だと考える。）。

A： 遊具広場としてユニバーサルデザインに配慮して整備をしたもので、砧公園全体がインクルーシブ公園ではない。都立公園では新規整備、遊具改修の際にユニバーサルデザインに配慮した遊具を整備することが考えられるが、理想はすべての子どもの身近に整備すること。区市町村の取り組みも必要。

Q： ハード整備だけでは足りないのでは？プレイパークはプレイリーダーというソフト＝人的資源が前提。インクルーシブ遊具だけではなく、支援員の配置は？

A： 東京都の整備計画はない。世田谷区など区市町村でやっている例はある。

エ 住民に対する説明や要望の聴取の仕方

Q： インクルーシブ遊具の導入にあたり、住民に対する説明や要望の聴取をどのように行ったか。特にインクルーシブ遊具という事で、「障害児の保護者」への聴き取り等、特段の配慮があったか。

A： 特別支援学校など、いろんな障害のある方に予めヒアリングして参考にした。精神科医にも。共通するニーズはフェンス。もとの遊具広場の既存遊具を活用して、団体の意見をもとに整備した。精神科医からは匂いや音、光を楽しむものがあつたら良いというアドバイスもあつた。

オ 既存の遊具とのコストの差と財源の確保

Q： インクルーシブ遊具の導入にあたり、一般的に用いられている複合遊具と比較して、どの程度コスト増があつたか。また財源の確保にあたって、助成金の活用やクラウドファンディングの検討などはどうであつたか。

A： 他の遊具との単純比較はできないが、一般にインクルーシブ遊具は他より高いと言われる。東京都の予算で対応している。

カ 遊具の安全性確保と運営上の苦勞など

Q： 安全性の確保などで苦勞している部分はあるか。また運営上、一番困っている部分はどこか。

A: 苦労は感じないが、視察の人がたくさん来るので日常点検には気を遣っている。インクルーシブの概念が伝わらない面もある。先月のイベントを Twitter で告知したが、インプレッションや「いいね」が少ない。植物の投稿のほうがそれらより多い。インクルーシブイベントというワードだけでは伝わらない。啓発イベントも必要。コロナに気を付けながら、どう人を集めるのかが課題。



キ 利用者からの意見

Q: 実際にインクルーシブ遊具を利用している方々からの意見等があったら参考までに伺いたい。

A: ネガティブな声は聞いたことがない。直してほしいのは入口が分かりづらいとか夏が暑いとか。入口はフェンスを色分けして対応、暑さは近くの2号売店に自動販売機を設置。府中の森公園には緑陰があってじゃぶじゃぶ池もあり夏場でも相当な人が来るが、ここは夏場の利用者は減る。



▲ フェンスを色分けして、利用者からの要望を改善

Q: じゃぶじゃぶ池はつukれない？

A: じゃぶじゃぶ池は夏場に人が集中するし事故もある。春も秋も利用者が多い砧公園は夏は落ち着いたほうがメリハリがある。水循環システムのほか電気、水道のコストがかかり、管理上もハードルが高い。

Q: 冊子「みんなの声から始めよう」のアンケートや事例もいい内容なので、もっとホームページで広報しては？

A： 去年まではコロナでできなかった。今後は制作者の一般社団法人 TOKYO PLAY と協力して広げていく。



「公園のことみんなの声からはじめよう！」

(砧公園 ホームページ)

https://www.tokyo-park.or.jp/park/facilities/pdf/minnanohiroba_kinuta_20210325.pdf

Q： 実際、人気がないとか使いにくい遊具は？今後の整備の課題は？

A： 床はゴムよりアスファルトのほうが車椅子で移動しやすい。遊具は伝声管が伝わりづらい。切り株は必要とする子どもが少なく、切り株に避難する前に親御さんの元に逃げてしまう。アンケートでは、もっといろんな遊具があったほうが良いという声もあるが、たくさん遊具があって嬉しいという声もある。



▲ ゴムチップの床が適所に配置されている。

Q： 遊具は余裕を持って配置している？

A： 余裕をつくった結果、芝地にシートを広げてのんびりする人が出てきた。はじめは禁止しようかと思ったが、ゆっくりできるほうが良いだろうと許可することにした。



7 視察を終えて

山田 ひろこ 委員長

多様性を身近に感じる出会いの場として、ユニバーサルデザインを取り入れた遊び場は、都立砧公園の一角にあり、その敷地の広さから複数の遊具が配置され、訪れる者を飽きさせない遊び場となっていた。公園内の駐車場のすぐそばにあるため、遠方からの車での来場も易しく、今後、益々利用者は増えるであろうと感じた。



ただ、2020年3月のコロナ感染症流行の真ただ中でのオープンであったために、そこを活用したイベントの多くが中止されたようだが、コロナ感染症終息後の今後は遊び場のみの利用に終わらず、イベントへの参加も期待でき、利用者には、楽しみの幅が広がると感じた。

都内で第一号というだけに、このような施設はまだ全国的にも少なく、それ故に、遠方からの来場者もありますが、インクルーシブな公園があるからそこへ行くのではなく、「インクルーシブ」は本来、身近にあるべきだと、感じた。文京区内において広いスペースを確保できなくても、狭い敷地でも古い遊具一つを交換する際に、インクルーシブ遊具を取り入れていくことが望まれる。

誰もが歓迎される公園、多様な子どもがいきいきと遊べる公園は、お互いを尊重し、支え合う社会の縮図です。遊び場の中に子どもたちの未来があるということを理解し、区政に活かしていきたい。

板倉 美千代 副委員長

遊具間の間隔がとられ、転倒してもけがを防ぐゴムチップ仕様や遊具そのものが子どもたちに魅力的なものでした。

開園前までの懸念は、開園後は多くが杞憂に終わりスタッフの皆さんが運営に携わることに心配なく取り組めたことはよかったですね。障害のないお子さんと障害のあるお子さんの利用率が9：1（1以下かもしれない）という説明をお聞きし、本来目的の障害のある子もない子も共に共通の空間で遊べるということが、現時点では達成しきれていないこと。また、各遊具には〇歳～〇歳とあり、12歳まで利用できるものもいくつかあるが小学生の利用が少ないとのことで、これからの工夫に期待したいです。



遊具や付帯設備のハード面とともに、人的なインクルーシブの必要性を強く感じました。

また、「ひろば」全体に木陰がなく（元々なかったとのこと）、温暖な季節時では過ごしやすと思われるが、真夏の日光を遮る空間が少なすぎるのではないか。また、「ひろば」の中に水場が必要だったのではないかと感じました。

今工事中の神明車庫跡公園にインクルーシブ遊具が設置される計画ですが、これから進める公園再整備ではインクルーシブ遊具を取り入れるよう、多くの皆さんからの意見を聴き、取り組むよう要望します。

たかはま なおき 委員

「障害のある子・ない子が一緒に遊ぶ、ということは自然には起こらない」と伺った。

障害の有無にかかわらず交じり合って遊ぶ、理想の空間を期待していたが、インクルーシブ遊具を整備しただけでは起こりえないのだと知った。

本年6月12日に開催されたイベントでは、来場者が関わり合って同じ時を過ごせる工夫をしたということだ。ハード面の整備だけでなく、ソフト面の工夫も必要であるということ、大きな学びとなった。

障害の程度によっては利用の工夫や、周囲の協力次第で、一般の遊具も利用できるということもわかった。文京区の公園再整備において、インクルーシブ遊具の配置だけにとどまらない、障害のある子もいない子も遊べる整備計画となるよう働きかけていきたい。

敷地の限られた文京区内で、飛び出し防止の囲いを含めて整備するには、公園全体を“インクルーシブ”とする必要があると考える。区民の皆さまを巻き込んで、機運を高めていきたい。

当日はあいにくの天候で利用者がいなかったからこそ、全ての遊具をタオルで拭いながら体感することができた。寝そべって乗れる円盤型のブランコは、小雨まじりの曇り空を浮遊している感覚であり、束の間、童心に返った。



沢田 けいじ 委員

日本初のインクルーシブ公園である都立砧公園の「みんなの広場」を視察し、遊具や環境の配慮、現場や行政の担当者の改善の取組について調査しました。具体的には、砧公園を目標にインクルーシブな公園づくりに乗り出す自治体が増えるなか、①物理的・心理的な障壁で公園を利用しにくかった人たちが安心して遊べる環境づくりや、②誰もが身近に通える市区町村単位のインクルーシブな公園整備が主な課題に挙がり、課題①については、誰もが参加できる子ども主体のアートワークショップや多様な利用者の声と利用状況を集めた啓発誌「みんなの声からはじめよう！」（協力：一般社団法人 TOKYO PLAY）など、地域の NPO 等と連携した周知活動によって、また、課題②については、都の「だれもが遊べる児童遊具広場」整備ガイドラインや、地域の要望に基づく自治体の公園づくりプロジェクトによって解決が図られています。年齢や性別、能力や社会的背景の違いに関わらず、すべての人が楽しめるインクルーシブな公園づくりには、初期段階から立場の異なる多様な地域住民や関係者を交えて対話を重ね、完成後も利用状況の継続的な検証・改善が不可欠です。本区でも整備の進展が期待されます。



田中 としかね 委員

多様性と包摂性の「公園ネットワーク」

砧公園「みんなのひろば」には、二つの「ひらがな」によるキャッチフレーズが掲げられている。一つは「だれでも、あそべる」、そしてもう一つは「みんなで、あそべる」である。このシンプルな表現の中には、極めて重要なコンセプトが秘められているように思う。それは、一つには「だれでも」が意味する「多様性」であり、もう一つは「みんなで」が意味する「包摂性」であると考えられる。多様性とはダイバーシティの謂いであり、それは一人ひとりが自分らしく生きることのできる社会をつくるための、普遍的価値である。一方、包摂性とはインクルージョンの謂いであり、障害を理由に不当に排除されることなく参画の機会が保障される、合理的配慮である。D & I をコンセプトにした「みんなのひろば」の取組により蓄積されたノウハウは「だれもが遊べる児童遊具広場整備ガイドライン」によって公表されている。文京区としても、「互いを理解し尊重しあえる公園環境」の実現に向けて、東京都及び隣接区とも「公園ネットワーク」を拡げながら、具体的な検討を進めていきたい。



岡崎 義顕 委員

都立砧公園内にある「みんなのひろば」を視察してきました。

「みんなのひろば」は、全国初のインクルーシブ公園として、障害のある子どもない子どもと一緒に遊び一緒に楽しむことのできる公園です。

当日は、あいにくの雨だったため、遊んでいる子どもはいませんでした。連日多くの子どもたちが利用し、年間200万人以上の来場者があるとのことでした。



「みんなのひろば」に入って、目にしたのがしっかりとした柵とゆとりのある空間でした。車いすで来た子ども安心して遊べるのを実感しました。

また、遊具一つ一つにも配慮と工夫をされていました。車いすや歩行器でも楽に登れそうな幅の広い緩やかなスロープがついている複合遊具や船形遊具。車いすも通りやすい迷路にはあちこちに触って遊ぶ仕掛けがあり、誰でも楽しめる工夫をされていました。また、それぞれの遊具のまわりにゴムチップが使われており、転んでもケガをしにくいように整備され、ベンチも幅広く子どもが横になることも可能です。

公園の整備にあたっては、障害者団体や専門家からのヒヤリングを重ね、工夫や配慮を心掛けたそうです。

文京区は今、公園再整備計画で公園のリニューアルを進めていますが、今後の公園の整備にとっても参考になりました。

高山 泰三 委員

都立世田谷公園内に設置されたインクルーシブ公園「みんなのひろば」を視察した。

モデルとなる公園がないため、障害のあるお子さんの団体やデザイナーの有識者など、さまざまな意見を取り入れながら整備を進めたという。

実際の利用者のほとんどは、健常者のお子さんだというが、誰でも安全に遊べる場所があることが重要であると感じた。障害のあるお子さんの中には、埼玉県や神奈川県も含めて遠方からやってくる方も多。



接地面積や、管理するノウハウなど一朝一夕に出来るものではないが、文京区の公園

再整備においても、特に遊具や公園の考え方について、取り入れられるものは大いに取り入れてゆきたい。

また、初めての試みであり、実際に設置した遊具の中で、例えばシートベルトを締めるとかえって危険なものなどもあり、こうした反省点も参考になるだろう。

あいにくの強い雨で、利用者を直接目にはできなかったが、現場を訪れてこそ理解できる部分が多かった。

雨のなか、ご対応いただいた関係者各位には改めて感謝申し上げたい。

吉村 美紀 委員

砧公園みんなのひろばは、障害の有無にかかわらず、あらゆる子どもたちが共にあそび、楽しむことができる施設であるが、施設内には、障がい児（特に知的障害のある児童）がパニックになった際に人目を避けて休むことができるような切り株型のシェルター遊具も存在しており、広場には飛び出し防止のための囲いも設置されていた。このような配慮が重要であると感じた。

当該公園は、楽器遊具や迷路等、様々なインクルーシブ遊具が設置されており、それらが一つの場所に終結していることにより、小さな遊園地がそこに存在しているような印象を受けた。

広場だけを提供していたとしても、ただそれだけでは健常児と障害児が相互の理解を深めていけるはずもなく、インクルーシブイベントを定期的で開催していく必要があるとのことだが、同園がインクルーシブイベントを実施する際、Twitterにて情報発信をしても「インクルーシブ」という概念がなかなか伝わらないという苦勞を仰っておられたのが印象的だった。

文京区においても、インクルーシブ遊具の設置促進のみならず、様々なインクルーシブイベントも同時に実施し、インクルーシブという概念の啓発に努めていけたら良いと思う。





雨の中の視察であったため、休憩室を利用させていただきました。